



## 2 型糖尿病におけるプロバイオティクスの効果

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 日本DOHaD研究会 公開日: 2019-01-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 金澤, 昭雄 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10271/00003456">http://hdl.handle.net/10271/00003456</a>

シンポジウム 1-4

2 型糖尿病におけるプロバイオティクスの効果  
The effects of probiotics in type 2 diabetes

金澤 昭雄

順天堂大学大学院医学研究科 代謝内分泌内科学

Akio Kanazawa

Department of Metabolism & Endocrinology

Juntendo University Graduate School of Medicine

近年、腸内フローラと肥満・糖尿病をはじめとする生活習慣病の関連について多くの知見が得られつつある。腸内フローラは腸管バリア機能の維持に重要な役割を担っており、腸内フローラのバランスの乱れによって腸管バリア機能の低下をもたらし、腸内細菌そのものや、腸管内のエンドトキシンが血液中へ移行すること (bacterial translocation) が宿主である我々に微小な慢性炎症を惹起し、インスリン抵抗性をもたらす可能性が指摘されている。これまでに我々は順天堂大学大学院プロバイオティクス研究講座とヤクルト本社中央研究所との共同研究により、2 型糖尿病患者において、腸内フローラのバランスの乱れがあること、生きた腸内細菌が高率に血中で検出されること、血液中のリポポリサッカライド結合タンパクの増加をまず報告した (Sato J. et al. Diabetes care 2014)。これらの結果を踏まえ、プロバイオティクス (乳酸菌シロタ株を含有する飲料) 投与群と非投与群にランダムイズし、腸内フローラや bacterial translocation に対する影響を検討したところ、プロバイオティクス投与群では一部、腸内フローラに変化が認められ、血液中へ移行した腸内細菌数はプロバイオティクス投与群で有意に低下した (Sato J. et al. Sci. Rep. 2017)。しかしながら、Interleukin-6 や高感度 C-reactive protein などの炎症性サイトカインや炎症マーカーなどは有意な変動を認めなかった。本シンポジウムでは 2 型糖尿病におけるプロバイオティクスの効果について述べる。

【略歴】

学歴・職歴：

- 1992 年 3 月 滋賀医科大学医学部卒業  
1992 年 5 月 滋賀医科大学 附属病院 研修医  
(旧第三内科入局、現：糖尿病内分泌・腎臓内科)  
1993 年 4 月 社会保険滋賀病院 内科  
1995 年 5 月 国立循環器病センター内科 動脈硬化代謝内科部門  
1998 年 4 月 滋賀医科大学大学院 医学研究科入学  
2002 年 3 月 同 修了 博士 (医学)  
2002 年 4 月 理化学研究所 遺伝子多型研究センター  
2005 年 1 月 順天堂大学医学部代謝内分泌学講座 助手  
2006 年 4 月 順天堂大学医学部代謝内分泌学講座 講師  
2008 年 4 月 順天堂大学医学部代謝内分泌学講座 准教授

専門領域：

糖尿病と腸内フローラ、糖尿病の薬物治療

所属学会：

日本内科学会 (認定内科医、総合内科専門医)、  
日本糖尿病学会 (専門医、研修指導医、評議員)、  
日本内分泌学会